

児童教育を支援する
「博報財団」が、すぐれた
取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

日本文化理解教育部門

栃木県 小山市立絹義務教育学校

「からまっちゃうー！」
「難しい！」
糸紡ぎに悪戦苦闘

結城紬の「糸取り」（絹糸の手紡ぎ）で伝統工芸士に認定されている塚原アイさんが、真綿をたぐって絹糸を細く細く紡いでいく。塚原さんを絹義務教育学校の4年生がぐるりと取り囲み、その指先をじっと見つめる。

次に、塚原さんにコツを教わりながら自分たちでやってみると、とても塚原さんのようにはいかない。
太くて不均一な糸を手にとり、安田心太郎くんは「ふー！思っていたより、ずっと難しい！」と嘆息する。実体験を通して、子どもたちは紡ぎ手の、経験に裏打ちされた手わざの妙を実感したようだ。

小山市立絹義務教育学校は平成29年に、栃木県初の小中一貫校として小山市立福良小学校、梁小学校、延島小学校と絹中学校が統合されて開校した。

本校の特色は、9年間かけて実施される「ふるさと学習」である。地場産業の重要無形文化財で伝統的工芸品の絹織物、結城紬のすべての生産工程を体験する。結城紬をテーマに据えた「ふるさと学習」は、統合前の福良小学校で始まったものだ。ふるさとの優れた伝統文化の理解と尊重継承、さらには日本人としての自覚と誇りを育む教育として、統合後の小中一貫校では、さらに後期課程での学習も加えて採用された。

真綿づくり（3年生）、糸紡ぎ（4年生）、絹づくり（絹模様のつくるために絹糸を木綿糸で縛って染まらない箇所をつくる作業）と染色（5年生）、そして機織り（6年生）と、結城紬を「からまっちゃうー」で仕上げている。指導するのは、

もちろん地元の結城紬の担い手たちだ。
さらに後期課程（中学）の7年生では結城紬の着物を着付けて、着心地を体験。8、9年生は、蚕の餌ともなる桑の葉や枝を用いて和紙、和菓子づくりを行うなど、9年生



4年生の真剣なまなざしを受けて、糸紡ぎの実演を披露する伝統工芸士の塚原アイさん(中央)。

9年間を見通した「ふるさと学習」による伝統文化を尊重する児童生徒の育成

ユネスコ無形文化遺産「本場結城紬」は、すべての工程が手仕事でなされている。職人の指導のもと、その工程の体験と発展的学習というユニークな取り組みに、博報賞（日本文化教育部門）が贈られた。

通して地場の伝統産業を体験しよう。

子どもに郷土の誇りを、未来の後継者の育成にも期待



糸紡ぎに挑戦する4年生。実際にやってみるとその難しさがよく分かる。

5年生では染色の体験学習をする。自分たちが3年生の時に作った真綿に、青、赤、黄の染料をかけて染めていく。これを指導するのは地元で130年続く染色店の5代目、大久保雅道さん。大久保さんはこの「ふるさと学習」が始まる以前から、近隣の多くの小学校で藍染を教えてきた。体験学習の指導歴20年の大ベテランで、工夫を凝らした指導を続ける。

「本来の結城紬は糸を染めませんが、子どもたちが紡いだ糸ではばらつきがあり、うまく染まらない。そこで真綿の段階であらかじめ染めてしまうという、工夫を思いついたのです」

全国的伝統産業は後継者不足が深刻な問題だが、結城紬もその例外ではない。「まず染色を知ってもらおうところから始めないと、将来の進路の選択肢にもなりませんから」

次世代に染色の魅力を知ってもらいたいと、大久保さんは指導に熱を込める。

この内容の濃いプログラムには、地場の伝統産業に携わる人々の理解と協力が欠かせない。未来を担う子どもたちを、地域一丸となって育てるのだという熱い思いが、全国的にも例を見ない貴重な活動を支えている。



5年生に染色の指導をする伝統工芸士の大久保雅道さん。



6年生は、養蚕から糸紡ぎなどこれまでの学びの総仕上げにあたる、機織りを体験をする。



色使いを真剣に考えながら染めていく。それぞれの作品には、児童の個性が表れる。



「郷土に誇りを持ってほしい」と語る倉井克之校長。

推薦者 お祝いのことば

この度の「博報賞」受賞は、市内初の受賞であり、義務教育学校開校2年目の快挙であります。おやまの宝「本場結城紬」教材で、おやまを愛するふるさと学習を実践された地道な教育実践が認められての栄えある賞の受賞、誠におめでとうございませう。地域の文化と伝統を最大限に活かし、地域の人々との協力を賜り、子どもの発達段階に合わせて、教育課程を展開して教育成果を挙げていただきました。これから求められる小中一貫教育のモデル的な展開に深く感謝申し上げます。この受賞を誇りにしていただき、他校のよき模範としてご活躍されることを御祈念申し上げます。

酒井 一行 教育長